

# カールの道化師

並立裏子

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

神を名乗る怪しげな住所不定無職（偏見）に自身が愛してやまないダイの大冒険の世界へと転生させられた男。

しかも面倒な幼少期を省いて大人の姿で、しかも転生特典もつけてくれるというのだから、渡りに船とばかりに大喜びする男。

三分調理が如くお手軽に転生を果たし、さあ今から冒険の始まりだと喜び勇んで駆け出す直前に気が付いた、自身の肉体の変化と、何時のまにやら身に纏う何処か見覚えのある衣装。

その胸元にテープで雑に貼り付けられたクチャクチャのコピー用紙には汚い字でこう書かれていた。

転生特典・ドルマゲスセット一式（本体も含む）

しかも転生先はあのカール王国。

チャチな手品と原作愛を武器に道化師（元魔法使い志望）の大冒険が今始められる気がしない!?

気紛れに投稿します。

内容と密度については、期待しないでください。  
クロスオーバー要素はドルマゲスセットだけです。

# 目次

第1話	1
第2話	3

## 第1話

「悲しいなあ……」

もう何度目かになるこの口癖を私は言わずにいられない。

ダイの大冒険。

子供の頃何度も読み返したあの傑作漫画の世界に転生したというのに、何故こんなことを眩かなければならないのか。

ドラゴンクエスト漫画の金字塔、ダイの大冒険は主人公ダイとそのパーティ（通称アバンの使途）達が活躍し地上消滅を企む大魔王バーンから世界を救うという愛と友情と努力の王道少年漫画だ。

黄金時代の週刊少年ジャンプを支えていた一角であり、当時から今に至るまで読者の心を熱くさせる確かな名作である。

かくゆう私も幼い頃よりダイの大冒険を愛読しており、物語の展開や重要キャラクター、はてはちよい役ぐらいの脇役の名前すら覚えているほどのフリークだ。

そんな私がこのダイ大（略称）の世界に転生したのである。それはもう主人公を一目みたいし、大好きなキャラクター達と少しでも御近づきになりたいと全力で行動していただろう。しかもまだ原作開始の10年前に飛ばされたのなら、来るべき災厄（本編）に備えてなんとか力を蓄えようとしていたと思う。

しかし結果として、私はそのようなことは一切しなかった。いや、出来なかったのだ。

嗚呼、せめて。せめて――。

「ねえ、ねえ、道化師さん。今日は何を見してくれるの？」

「あれやって、前見してくれたやつ！」

「道化師さん！」

ギルドメイン大陸にある3大国の一角、勇者アバンの故郷であり世界最強と名高い騎士団を有する通称『騎士の国』カール王国。その首都である城下町にて。

質実剛健を旨とする国民性からは考えられない、ガヤガヤという人混みと騒がしさが聞かれるようになってからもう五年ほどになる。

騒ぎの中心にいるのは、その原因を作り出している文字通りの張本人。

赤と青の特徴的な服装を身に纏い、真つ先に側に寄ってきた小さな観客へ光の球を操ったり、奇術を見せて喜ばせては被っていた山高帽子をひっくり返し遅ればせながら子を追ってきた大きな観客から賽銭を集めている一人の男。

「いつ見ても見事なもんだねえ」

「あんたが来ると子供らが騒がしくて叶わないよ」

「今度は何時まで居るんだい？」

親しみの込められた歓声を一身に浴びながら、ペコペコとお辞儀をし、軽い身のこなしでまた観衆に囲まれた騒ぎの丁度真ん中あたり、男にとっての舞台ステージの中央に戻る。

そうしてからはまた子犬のように群がってくる町の子供達を何とか宥めつつ、大人たちの野次にも答えつつ、ちやちな手品（光の球）を披露してはおー！と周りの歓声を呼び起こしながら、男は今となっては仕方のないことと分かっているがつつい考えてしまうのだ。

（ああ、せめてこんな道化師すがたじゃなかったら）

男の名はドルマゲス。

騎士の国カール王国に住む一人の道化師である。

## 第2話

転生直後は私も色々足掻いたものだった。

ドルマゲスと言えばドラゴンクエスト8に登場する悪役兼中盤の大ボスであり、ドラゴンクエスト8におけるあらゆる事件・悲劇の発端を作ってしまった張本人でもある。

見た目の極悪人面はどうかと思うがそれでも、ドラゴンクエスト8の主人公パーティを幾度となく苦しめたその実力は本物。流石に物語後半の魔宮内での戦闘や大魔王戦とかになれば厳しいだろうが、軍団長下位程度の力はある筈だ。

早速試してみようと、人気の無い野原で呪文の発動を試みるが、失敗。

「……………!?!」

いや、失敗すら出来なかった。

呪文を唱えても唱えてもうんとも寸ともならない。

ドルマゲスがゲーム内で使用していた呪文。そのどれ一つとして発動出来ない。剥きになって記憶にあるドラゴンクエスト知識を総動員してありとあらゆる呪文、特技にまで手を伸ばしてみたが、結果は変わらず。

ドルマゲスは呪文を唱えた！

しかし、何も起こらなかった!!

ゲームなら間違いなくそうテロップ流れていたことだろう。

そんな不毛な状態を幾度となく繰り返しては落胆し続けた私が、ダイの大冒険特有の設定（呪文との契約）に思い出すに至ったのは、最初に始めてから小一時間ほどが経った頃のことだった。

ダイの大冒険の世界では呪文はレベルが上がれば必ず覚えられるものではなく、その呪文に対応した契約の儀式を行わなければならなかったのだ。

こんな基本的な知識（ダイ大脳）をど忘れするとは、いい年してどれだけ興奮していたんだろう。

自らの不甲斐なさに赤面しつつも、私はカール国立図書館（そんなのあったんだね！）に向かった。

しかし警備の兵によって門前払い。身元も分からない怪しげな人は入れてくれないそうだ。そりやそうですよね！

当たり前過ぎる対応によって一時は絶望しかけたが、そんな私を通りすがりの1人の女性魔法使いが不憫に思ったのか、自分が一冊代わりに借りてきてあげようかと声をかけてくれた。

ビバご都合主義キタコレ！

とキアラ崩壊しつつもお言葉に甘えて一冊、初歩的な呪文との契約について書かれている本を借りてきてもらうことにした。

勿論、そんなものを借りたがることを怪しまれはしたが、昔から憧れていて契約できるかどうかどうしても試してみたい、と頭を下げて頼みこんだら案外あっさりと借りてきて貰えた。

渡された魔導書を手に先程の野原へ戻る私と、何故かその後を興味があると着いてくる女性魔法使い。

やはり怪しまれているのだろうか、とこの悪人面を少し恨んだりもしたが、しかしやっと呪文が使えるのだ。

気分を入れ換え、野原に戻った私は早速契約の魔方陣を地面に描き、女性魔法使い指導の下、契約の儀に臨んだ。

記念すべき最初に選んだ呪文は本当に初歩的な火の呪文。

メラ。

ダイ大世界ではいまいちギラ系に比べて扱いが悪いが、それでもドラゴンクエストを代表する呪文の一つであることに変わりはない。

相手にとって不足なし、と謎の意気込みを見せ挑んだ私であるが結果は……………失敗。

……………契約を結ぶことすら出来なかった。

側で見ていた女性魔法使いに聞いて、他にも色々な契約の儀式を試してみたが、その何れも結果は同じ。

そしてここに至って、やっと私は理解した。



いや、本当は初めて今の自分の顔を見たときから、薄々気付いていたのだ。

服装や格好はゲームでよく見る彼のものだが、2つだけ異なる点があったのだ。

悪役だった頃のドルマゲスはこんなに生氣のある血色の良い顔をしていない。

こんな黒い髪はしていない。

これは、この見た目は。

弟子マゲスだ。

彼、ドルマゲスは他のドラゴンクエストのボスキャラクターとは少々異なる過去を持つ。とある暗黒神に魅いられ取り付かれるまでは、ほとんど何の力もない単なる魔法使いの弟子兼世話係でしかなかったという過去。高名な師を持ちながら実力の伴わない自らの才能の無さを周囲に嘲られた、過去。

私は、正しく無能<sup>ドルマゲス</sup>だったのだ。

それから、どのくらい呆けていたのだろう。

何時のまにやら日も傾き出す頃まで、隣から聞こえてくる慰めるような声にも耳を傾けず、その場でボーっと立ち尽くしていたようだ。

様子を見かねた女性魔法使いは、近隣の村に住む老夫婦に個人的に依頼したらしく、気が付けば私は少々強引に家へ連れ込まれ保護されていた。

そして老夫婦から柔らかな毛布を掛けられ、暖かいスープとパンを無償で与えられていた。

「人生上手くいことばかりではない。何かに躓くこともあるんじゃないよ」

「そうよ。それにまだ私の知らない呪文と契約出来る可能性もあるんだし、そんなに落ち込むことないって」

老夫婦と女性魔法使いはそう言って優しく私を慰めてくれた。

人間、現金なものでそこまでされると、不思議と何とかなるのでは、という気が起こってくる。

そうだ。まだこの世界全ての呪文を試した訳じゃない。それにそれで駄目でもこの世界には闘気のような別の技術もある。運動神経に自信はないが、ダイ大への愛を原動力に頑張ればそれらを習得出来るかもしれない。

最悪、戦う力を得られなければ現代知識と原作知識を生かして知恵者として活躍出来るかもしれない。

前向きに考え方を変えれば、自分にはいくらでも選択肢があるのだ。

老夫婦と女性魔法使いのお陰でプラスの思考へ切り替えることの出来た私だが、そこでふと疑問に思う。

どうしてここまで良くしてくれるのだろうか？

家中の様子を伺えば、決して余裕のある家庭には見えないが、全くの見ず知らずの自分にここまでしてくれるのは何故なのか。

老夫婦にしろ女性魔法使いにしろ、ご都合主義というにも少し出来すぎな気もする。

正気を取り戻した私には、その過剰なまでの優しさがどこか不気味にすら思えたのだ。

何か裏があるのではと尋ねてみると、老夫婦と女性魔法使いは顔を見合せた後、少し悲しげに笑ってから思いの外あっさりと答えてくれた。

あんたみたいな顔をしている人を、五年前はよくよく見掛けたからね。

そういう顔をした人は、放っておくと直ぐ何処かへといなくなってしまうんだよ。

そんなことはもう見たくないからね。

「……………ああ、悲しいなあ」

自分が、自分の人間性が虚しいほどに悲しくなってきた。

この世界では、魔王討伐からまだ五年しか立っていない。

その脅威が無くなったとはいえ、その傷跡にはまだ痛々しいほどに血が滲み続けている。乾いて瘡蓋になってなどいない。塞がってもいない。

戦後なのだ。ここは。

それなのに自分は、呪文が使えないのにこの世界に來ても何の意味も無いだのなんだのと。

目の前で優しくしてくれている人達のことを無視して自分の事ばかり。

あぐくその優しさすら疑う始末。

ご都合主義？

違う。

人と人が協力しなければ生き抜けない時代があつたのだ。

放っておけば、放っておかれれば、誰しもが生きていけない時代が、確かに五年前に。

だから困っている人を見過ぐせない癖のようなものが人々の間に自然、息づいているのだ。

そこまで考えて、気が付けば私は泣いていた

心底から自分が情けなくて、そんな悲しい経験に裏打ちされた優しさが暖かくて、同時にとても辛くて。

子供のように一晩中、私は泣き続けた。

そんな私に、老夫婦と女性魔法使いは何も言わず寄り添い続けてくれた。